

小林保健所における アルコール依存症対策の取組

～「家族教室」開催を通じた宮崎県断酒友の会との連携～

○小園郁美¹⁾小野智美¹⁾高藤ユキ²⁾和田陽市²⁾
都城保健所¹⁾小林保健所²⁾

1 はじめに

＜小林保健所管内の現状＞

人口 65,062人(小林市・えびの市・高原町)

高齢化率 41.5%

精神科病院・・・2病院

精神科外来のある病院(精神科病床なし)・・・1病院

精神科訪問診療クリニック・・・1診療所

アルコール依存症専門医療機関・・・なし

隣県や隣市(鹿児島県や
都城市)に専門病院あり

アルコール依存症の自助グループ

- ①断酒友の会西諸支部
- ②断酒友の会えびの支部
- ③小林保健所アルコール家族教室

※AA小林会場(H30年休止)

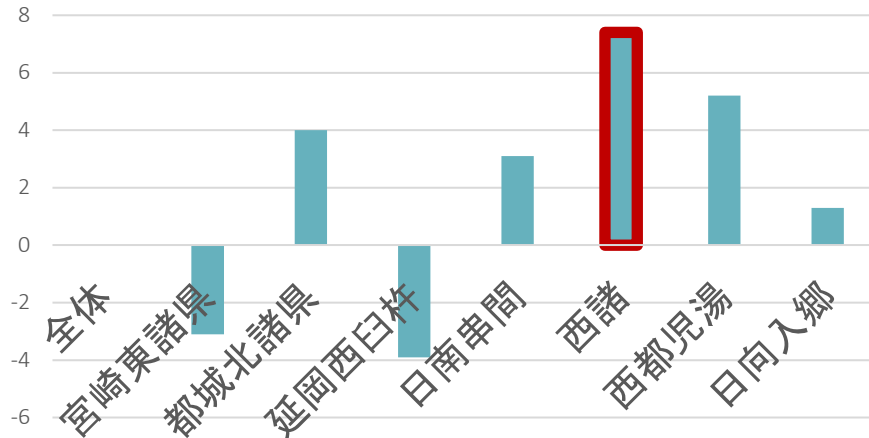
西諸地域は、毎日の飲酒者、2合以上/日の飲酒者が多い。

【令和3年度 特定健康診査】

お酒を毎日飲む

標準化該当比(対都道府県)－100

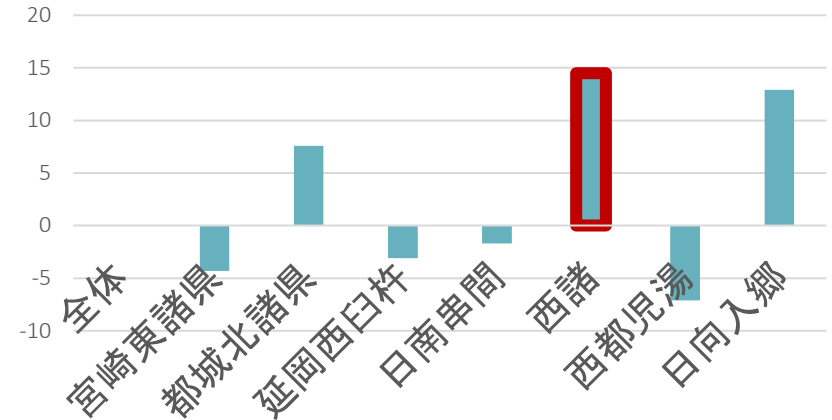
男性 40～74歳



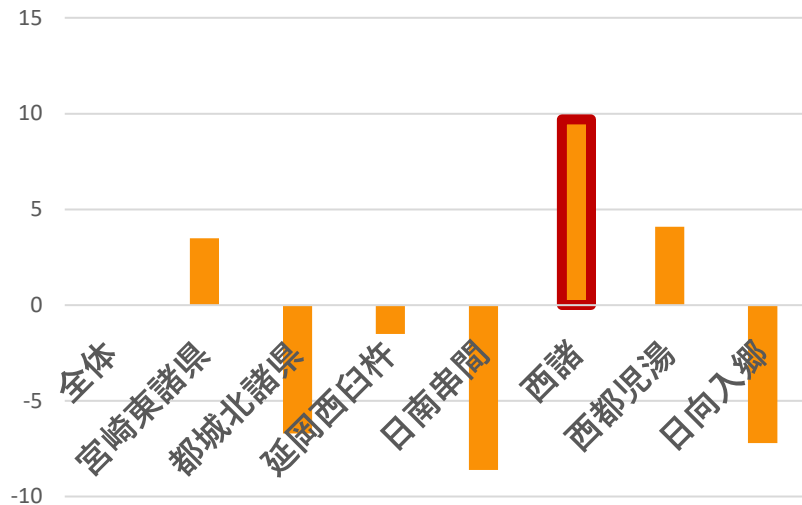
1日あたりの飲酒量≥2合

標準化該当比(対都道府県)－100

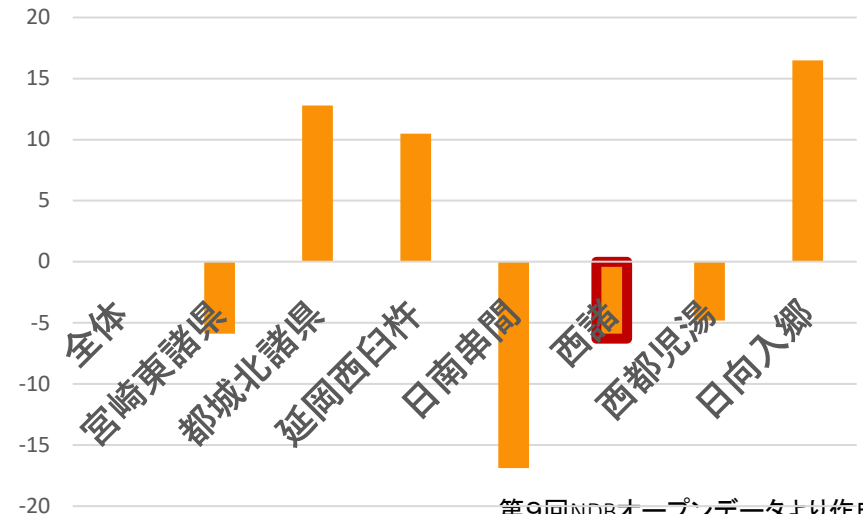
男性 40～74歳



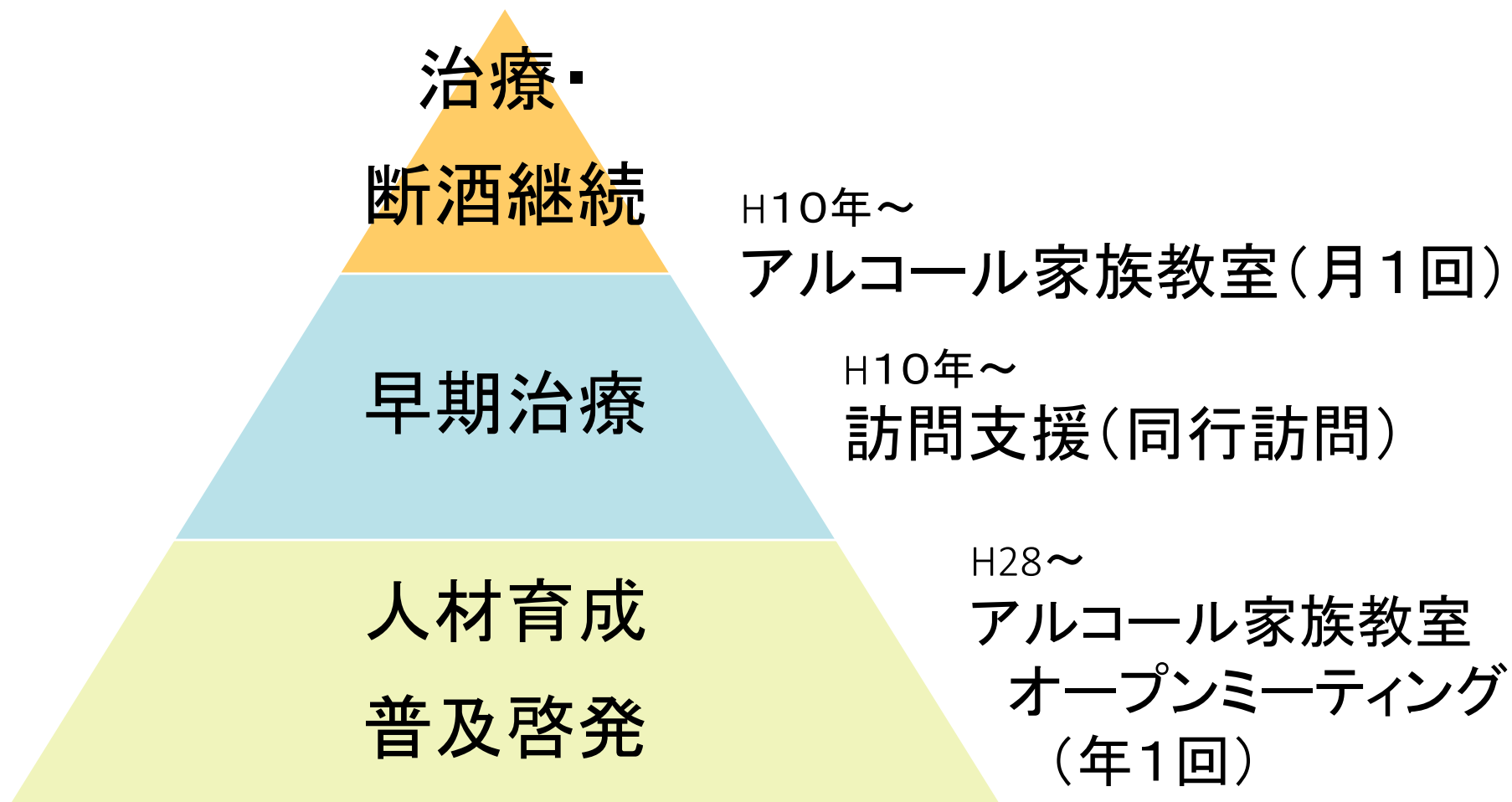
女性 40～74歳



女性 40～74歳



2 断酒会と連携した アルコール依存症対策の事業



研究目的

令和元年度～令和5年度の取組を振り返り
断酒会との連携の効果と意義を考察する

アルコール家族教室の開催内容(月1回)

<参加対象>

家族や知人、アルコール依存症当事者

<周知方法>

市町広報紙、関係機関への周知及び周知依頼、宮崎県HP等

<開催の流れ>

①保健師による講話

資料は、特定非営利活動法人ASK発行のミニガイド、季刊誌等を活用

②参加者同士のミーティング

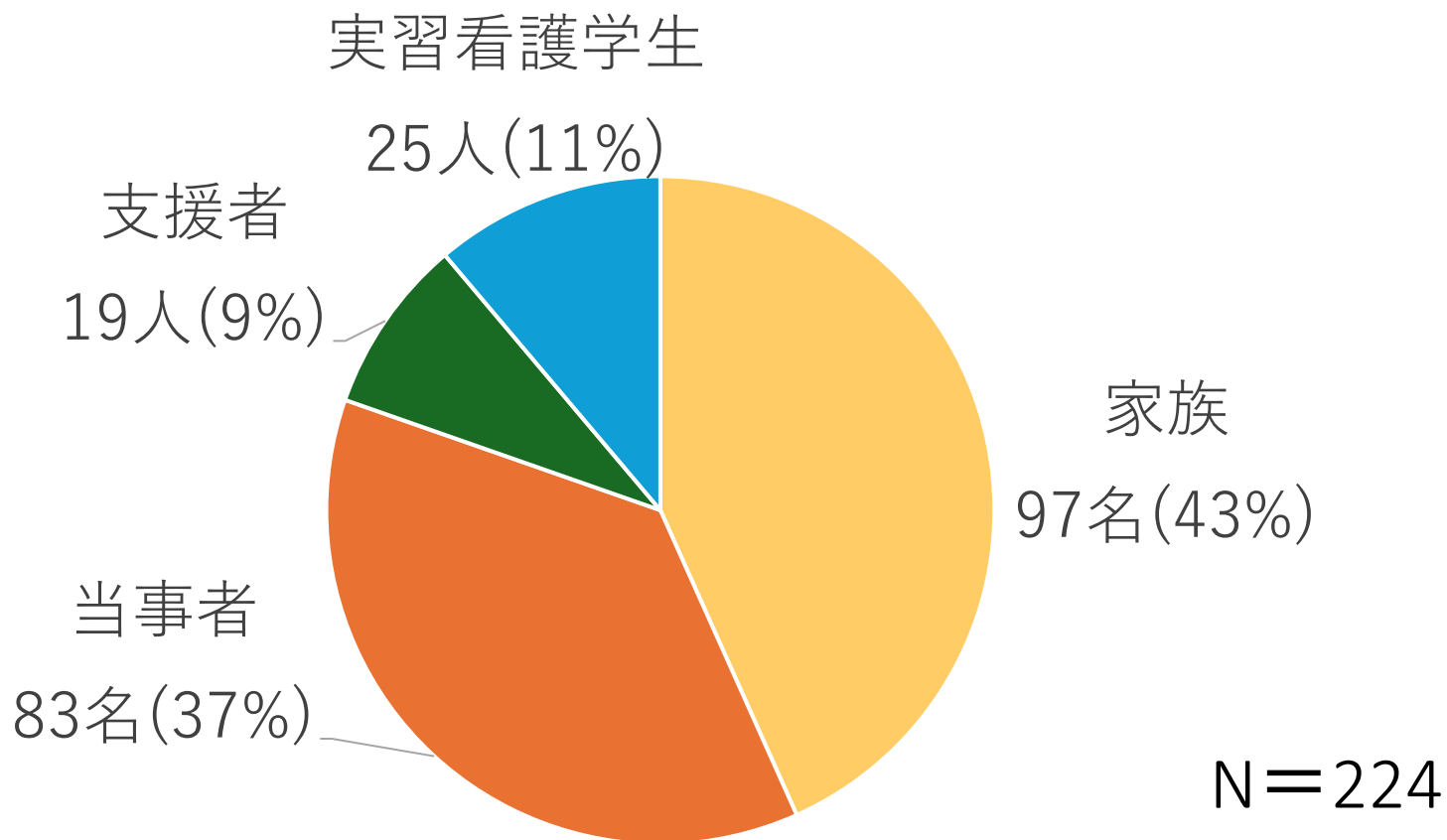
毎回、断酒会からの参加あり。
オープンミーティングや同行訪問実施に向けて
断酒会と意見交換を行う場ともなっている。



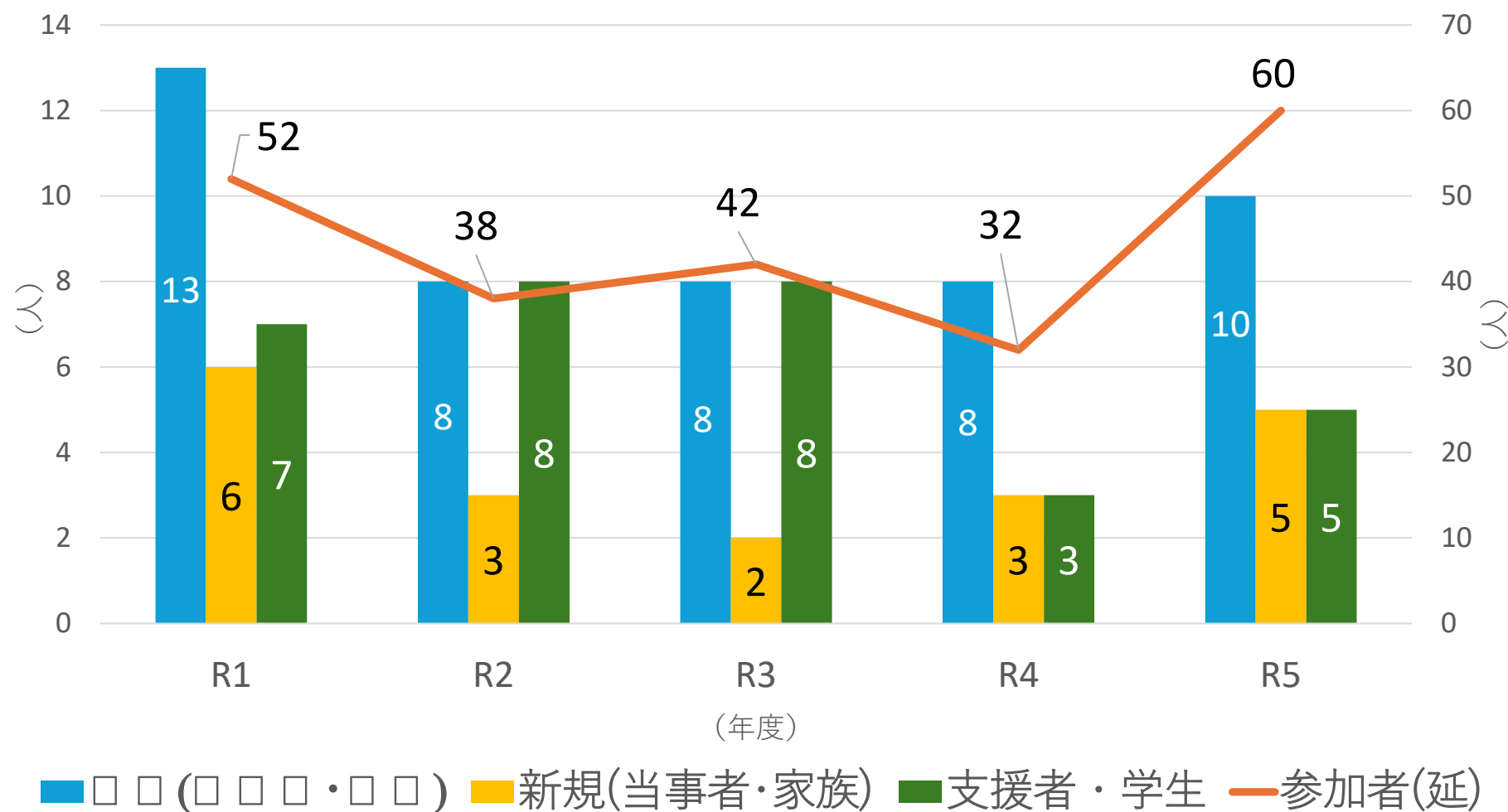
3 結果

アルコール家族教室延参加者の内訳

(令和元年度～令和5年度)



アルコール家族教室参加者の状況



注) 継続・・・過去1回以上の参加歴があるものをカウント

アルコール家族教室新規参加者の参加経路

(令和元年度～令和5年度)

新規参加者		参加経路						
		断酒会	病院	当保健所	家族	市保健師	AA	チラシ
当事者	5		2		2		1	
家族	14	6	1	3	1	2		1

○ミーティング内容: アルコール・処方薬・アダルトチルドレン・ギャンブル

○参加者の住所地: 管轄地域外(都城市、宮崎市、西都市)もある

アルコール家族教室新規参加者の断酒・治療状況

(令和元年度～令和5年度)

新規参加者		(再掲)			
		断酒継続	専門医療を受診直後	再飲酒	未治療
当事者	5	1	3	1	
家族	14	3	4	1	6
(再掲) 当事者・ 家族の うち	教室参加(3回以上)	1		1	2
	断酒会の参加あり	4	2	2	2
	教室参加後、専門医療に繋がった事例			1	3

○新規参加者の継続参加率(3回以上)は、21%。

○新規参加者のうち、断酒会の参加があるものは、53%。

○再飲酒や未治療事例のうち、4事例が専門医療に繋がった。

●アルコール家族教室オープンミーティング(年1回)

開催場所: 小林医療看護専門学校

	R1	R2	R3	R4	R5
参加人数	43	未開催	45	51	未開催
アンケート回答者	39		39	46	
回答率	91%		87%	90%	
参考になったとの回答した者の割合	85%		92%	89%	

●訪問支援(断酒会との同行訪問)

	R1	R2	R3	R4	R5	合計
訪問件数	22	5	8	0	6	41
うち同行訪問件数		1			2	3(7%)

→ 同行訪問のうち1件が専門医療機関入院へ

4 考察

断酒継続者（断酒会）の経験則に基づく語りは、**依存症に対する捉え方や接し方を変える。**

・回復モデルの存在⇒専門医療へ繋がる事例へ

家族教室新規参加者の定着率は低い。

だが、家族教室の必要性を理解する継続参加者がいる。

・最初は1日断酒目的だったが、断酒が継続すると、**他者のためにも**アルコール家族教室へ参加を行う姿勢となる。

⇒教室では、**家族支援から本人登場までの取組（早期治療の取組）**を重視
仲間の存在を大切にする断酒会では、治療・断酒継続の取組を重視

断酒会との同行訪問を希望する家族は少ない。

➡(教室や相談の場で)

家族と本人の関係再構築の過程を支援
家族が思いを表現出来ることを重視

病気の特徴を学び、本人の性格は
別物であることを理解していく

支援者側が、当事者対応に困難感を抱きやすい。

➡断酒会と共に対象を捉え直すことが出来る。

5 今後の展望

～未治療者が専門医療に繋がるために～

○看護学生へのアプローチを継続

予防教育

将来の医療従事者としての早期発見・早期介入の役割を期待

○一般住民や支援者へのアプローチを強化

勉強会や集会等の場へ断酒会等の講師派遣を行う

“こころの健康出前講座”を新たに開始

○アルコール以外の依存症への対応

「本人の生きづらさや家族の苦労は共通する。近場で参加出来る場を求め、断酒会にも来る。」との断酒会の意見

➡アルコール以外の依存症に悩む人が話せる場づくり

6 おわりに

①今後も家族教室が**地域の社会資源**となるよう
評価と改良を重ねる。

②教室開催を継続し、断酒会と共働する。

断酒会が、**自らの健康問題の回復から**

地域の健康問題の解決を目指していく過程を
支援していきたい。